

分かりやすい案内誘導と 公共空間のデザインに関する研究

地土木研究所地域景観ユニットでは、主に観光交通におけるユーザー視点の、景観にも配慮した効果的な案内誘導の提案や、空間デザインと組み合わせた効果的な案内誘導手法の検討を目指して研究を進めています。

背景と目的

道路を利用しての移動では、目的地までの分かりやすくスムーズな案内誘導をすることは重要であり、そのために道路標識は「必要不可欠」な施設です。

特に、北海道は観光が重要な産業の一つで、中でも道外や海外からの観光客によるレンタカーを利用したドライブ観光の割合が高く、近年増加傾向にあることから、不慣れな観光客や外国人などには重要です。

さらに、案内誘導サインは景観など周辺への影響は大きく、この 観点からも大変重要な施設です。

しかし、わかりにくいとの道路利用者からの意見もあり、必要以上の大型化、多言語化、乱立などを招き、案内効果の低下や景観の阻害などの課題があります。

また、標識だけでの案内誘導には限界があり、わかりやすい空間 デザインも重要となります。

そこで地域景観ユニットでは、「効率的な整備」「コスト低減」「安全対策」「景観の向上」に寄与する、わかりやすく効率的な案内誘導の提案や、空間デザインと組み合わせた効果的な事例集の作成を行います。



▲道路案内標識が乱立している事例

背景

「必要不可欠」ではあるが

- ①わかりにくいものも
- ②周辺への影響が大

目的

「効率的な整備」「コスト低減」「安全対策」「景観の向上」

効率的なサイン計画の策定に貢献

そこで地域景観ユニットでは、次の様に研究を進めていきます。

資料文献調査・取り組み事例調査・現地調査

現状の課題・ 問題点の把握、体系化 利用者ニーズ・ 評価の把握

空間からみた わかりやすさの事例把握

わかりやすく景観にも配慮した 効果的な案内誘導手法の検討

空間からみた わかりやすさの検討

- ①わかりやすく景観にも配慮した効果的な案内誘導手法の提案
- ②わかりやすい空間デザインと組み合わせた効果的な案内誘導に関する事例集の作成

調査結果から得られた課題

●道路案内標識には、次のような課題があります

利用者から「わかりにくい」との声が上げられており、このことなども受けて、国土交通省の 検討会では、様々な課題やそれに対する提言をしています。さらにその中で、道路案内標識の みで全ての案内誘導を行うことは不可能とし、道路案内標識に限界があるとしています。 また、道路案内標識は周辺に対し、次の様な影響があります。

- ①交通安全への影響(標識柱への衝突事故の発生など)
- ②コストの増加(設置費用の増加、維持管理費用の増加など)
- ③景観への影響(自然景観や農村景観などの地域の重要な資源を阻害していないか)



▲案内標識が乱立していないか?

●日本国内の文献資料からみた課題

①サイン自体の課題:

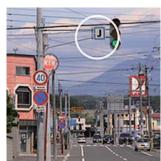
- ・サインシステム (ルール、設置位置・数、など)
- ·表示内容 (分かりにくさ、読みにくさ、地名の不整合、など)

②配慮すべき事項:

- ・視環境の低下と景観阻害 (乱立、沿道環境の複雑化、など)
- ·高齢者対策 (急増する高齢ドライバーへの対応など)
- ·維持管理 (樹木の繁茂による阻害、標識自体の劣化と更新、 コスト縮減、など)

●北海道での改善取り組み事例(社会実験や検討会の開催など) からみた課題

- ①表示内容(現行基準の規定が地域の意識と相違、多言語に未対応、など)
- ②案内システム(ルート上の「曲がるべき交差点」が分かりにくい、各検討会での調整や 検討策の実行性の確認が困難、など)
- (3)景観への配慮(問題意識の共有ができる、具体的な景観配慮方法の検討が困難、など)







▲わかりやすい交差点案内標識に関する社会実験の実施状況の一例

▲集落名を変更した

(トオ\ハソベ\ソ→標茶市街)

わかりやすい案内誘導に向けて

前述の課題受け、地域景観ユニットでは改善に向けた考え方などを次の様に考えています。

●改善に向けたアプローチ

- ①現状の問題点の適切な把握
- ②適切な改善方法の検討と実践
- ③改善への取り組みの評価と、 次回の取り組みへの反映



●改善策を実施する上での課題の解決レベル

- ①現地対応型:現行基準の範囲で対策が可能(比較的容易)
- ②地域ルール策定型:現行基準に具体的な判断基準が記載さ れていない事項
- ③基準改定型:現状に合わせて、基準などの改正が必要 (現場では対応が困難)

●改善への取り組みを進める上での検討すべき視点

①改善の対象は何か?

ハード:標識自体

ソフト:表示内容の策定や連携システム (改善対象により、検討事項や改善方法が異なる)

②案内標識の整備段階はいつ?

(道路の整備段階により、改善の対象となる施設や範囲が異なる)

③課題へ(現場で)の対応レベルによる違いは?

(問題の内容により、対策の難易度が異なる)

改善の具体案(一例)

●沿道環境による「わかりやすさ」の違い

沿道環境が複雑な(情報量が多い)場合、ドライバーの視点移 動が多く(視点が定まらない)、標識への注視回数や注視時間が 少ない(よく見ていない)ことがわかっています。このため、複雑 な沿道環境ではストレスの増加や情報誤認の恐れがあるため、 案内標識の周辺はシンプルな空間が望ましいです。





▲沿道環境による見え方の比較イメージ